

列車の脱線考（その一）

稲宮 健一

脱線事故で検索すると、二〇〇五年四月二五日発生の福知山線脱線事故の原因や、責任の追及の様子を被害者とJR西日本の立場で詳しく記述した松本創著『軌道』が二〇一八年に出版されたのを知り早速読んだ。松本は神戸新聞の記者を経て、今はフリーのジャーナリストである。被害者の中に妻をこの事故で失った浅野弥三がいた。浅野は建築士で、大型のニュータウンの企画や施工を職業とする大きな視野で物事を見られる専門家である。松本は浅野の被害者としての活動を通じて事故の全貌を記述した。

事故の物理的な現象は許容時速七〇kmの曲線部を一二〇km近くで通過しようとして脱線した。その結果、線路域から逸脱暴走した車両は沿線の鉄筋コンクリートのマンシヨンの壁に激突し一〇六名の死者と五六二名の負傷者が犠牲になった。

当時JR西はこの路線と並走する阪急との乗客獲得競争を意識して、乗務員に定時運行を厳しく指示していた。運転手は脱線現場の手前までに負ってしまった遅延を取り戻そうと速度超過で走行してしまった。惨事の原因は列車の安全より、乗客獲得を重視したJR西に管理責任があるのではないか。もし、速度超過があっても、自動的に速度を制御できるATSへの投資が早かったら、脱線は防止できたのではないか。松本は浅野を代表として、JR西という強大な組織を率いる幹部の責任追及を克明に書いている。特に松本はジャーナリストとして、JR西の幹部の動きを詳しく解説をしている。

JR西はこの事故の反省として通常の走行状態で速度管理を厳格に守れば良いと理解して、ATSの整備及び、この本には触れていないが、台車に異常振動検出のセンサを取り付ける実車モデルの大規模な研究を進めている。しかし、運転規則を守れば脱線を起さないという理屈は成り立たない。例えば、首都直下地震のような大きな外圧が発生した場合、ここで検討している措置では脱線を防げない。次回にその所見を述べたい。